



国際仏教学大学院大学

# いとくら

ITOKURA

学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」ニュースレター

第2号  
2007.1

七寺の経蔵 / 中村 一紀

スクロールビューアについて / 村川 猛彦

《古写経紹介》

金剛寺一切経と安世高の漢訳仏典 / デレアヌ フロリン

《蔵の中》

天野山金剛寺の浄土教典籍 / 落合 俊典

古写経と微生物 / 吉川 也志保

《寺院紹介》

西方寺



金剛寺一切経本「大乘起信論」冒頭部分





金剛寺一切経本『大乘起信論』冒頭部分

《表紙写真紹介》

金剛寺一切経本『大乘起信論』について

木村 清孝

『大乘起信論』は如来藏系の論書として、東アジアの仏教世界において極めて重要なものである。この論書は、馬鳴（アシヴァゴーシヤ）なる人物が著し、6世紀に中国に來た訳経僧の真諦（パラマルタ）がまず訳出し、後に八十卷本『華嚴経』等の翻訳者実叉難陀（シクシャナーンダ）が再訳したと伝えられている。

馬鳴という名を持つ仏教者としては、1～2世紀頃に出た仏教詩人が有名である。しかし、この人物を本論の著者とみなすことは、内容的にも困難である。そのため本論の著者は、龍樹（ナーガールジュナ）以後、4～5世紀頃に現れた同名異人の馬鳴である、とする説もある。確かに、本論の思想的素材のほとんどはインド仏教の諸文献の中に見出せるし、2つの「漢訳」とされるテキストも、訳書として目立って不自然なところはない。これらのことは、本論のインド成立を支持する材料である。しかし、インド・西域の仏教の文献や遺品の中にその存在と影響を証するものがほとんど見出せないのみならず、訳者の伝記、テキストの構成と論理、4～6世紀頃のインド以東の歴史状況などを詳細に検討してみると、逆に、それが当初、インドにおいて梵本として成立したというのを疑わせる材料が次々に出てくる。現在の筆者の推測では、少なくとも本論が最終的にまとめられたのは6世紀の中国文化圏内に

おいてであつて、初出のテキストが真諦訳とされるのは仮説であり、また実叉難陀訳とされるテキストは何人かによるその再治本であろうと思われる。

『大乘起信論』上記の2種のテキストには、多くの写本・刊本が伝えられている。中でも、天平勝宝6年（754）の奥書をもち、本文に平安時代前期と思われる訓点が付されている日本の東寺観智院蔵本は、同書の真諦訳本の最古の写本として重視されてきた。今回採り上げた金剛寺一切経本（真諦訳本とされるものの写本）は、平安時代後期（12世紀）頃の書写で、加點（移点）の時期もほぼ同時代と推測される。首題には「大乘起信論一卷 馬鳴菩薩造」、奥書には「幸一九七歳」云々と記されている。本書は、東寺観智院蔵本同様に古訓点が本文に付されており、平安後期の写本として貴重な文献なのである。東アジア仏教の形成と展開に大きな影響を与えた『大乘起信論』は、中古～中世の日本においてどのような読み方をされ、どう受容されていたのか―今後の研究により、この点が明らかになることが期待される。

なお、表紙の写真は、同書の冒頭部分である。訓点から、最初の一句である「歸命盡十方」は現在とは異なり、「命ハ盡十方ヲ歸セシメタテマツル」と訓読していたことが分かって、大変興味深い。

（本学学長、教授）

\*『日本古写経善本叢刊』第2輯所収予定

## 目次

### 《表紙写真紹介》

金剛寺一切経本『大乘起信論』について ————— 木村 清孝 (1)

換気に工夫を凝らした貴重な建造物

七寺の経蔵 ————— 中村 一紀 (3)

システム工学分野で開発した最新のアプリケーション

スクロールビューアについて ————— 村川 猛彦 (5)

### 《古写経紹介・その二》

金剛寺にのみ現存する安世高訳『安般守意経』など、  
そこに見られる安世高の漢訳の苦勞

金剛寺一切経と安世高の漢訳仏典 ————— デレアヌ フロリン (7)

### 《蔵の中》

浄土教関係の文献7点を紹介

天野山金剛寺の浄土教典籍 ————— 落合 俊典 (9)

古写経の大敵「カビ」、その実体と予防法は？

古写経と微生物 ————— 吉川 也志保 (11)

### 《寺院紹介》

奈良県の浄土宗寺院、2,000巻を超える古写経を所蔵

西方寺 ————— (13)

### 《活動記録》

古写経研究の最新事情

公開研究会 ————— (13)

### 《出版物紹介》

写本・刊本を7種掲載

大乘起信論 ————— (14)

今後の予定・次号紹介 ————— (15)

いとくら：私たちが調査している古写経を収める「経蔵」からの造語。「経」を意味するサンスクリット語“sūtra”には「いと」などの意味があり、また「経」には「たていと」という読みがあることから、「経蔵」を「いとくら」と読んでニュースレターのタイトルとしました。



## 七寺の経蔵

中村一紀

七寺は、昭和20年3月の名古屋空襲により、旧国宝の本堂をはじめ堂宇を焼失したが、からくも経蔵だけが焼け残った。

この時、平安末期の一切経と唐櫃はともに疎開していたため難を逃れた。もし、収納されたままであれば空襲による高熱で櫃はもとより一切経にも何らかの影響が出ていたと思われる。この経蔵は、明治28年(1895)に建造されたものであるが、空襲によりそれまで寺に保管されていたという建築にかかわる書類も焼失し、設計等に関する一切は明らかでないという。

筆者は本プロジェクトに参加されている吉川也志保氏のお誘いを請け本年3月と8月に数日間、その構造等の調査と若干の環境整備を行う機会を得た。ここではその構造と現状などについて述べていきたい。

経蔵(図1)は、寄せ棟煉瓦造り、屋根は瓦葺きである。入口を北に向け、一辺5メートル余のほぼ正方の形状を持つ。棟高は計測できないが屋根下までは約3.3メートルである。蔵は高さ約60センチ強の基壇上に建ち、現在は外壁にモルタル塗装が施されている。入口は内側に網引き戸、外



[図1] 経蔵

側に観音開きの鉄扉を持つ。おそらく土か漆喰の戸に鉄板を覆ったものである。壁厚は入口部でおよそ50センチを計る。

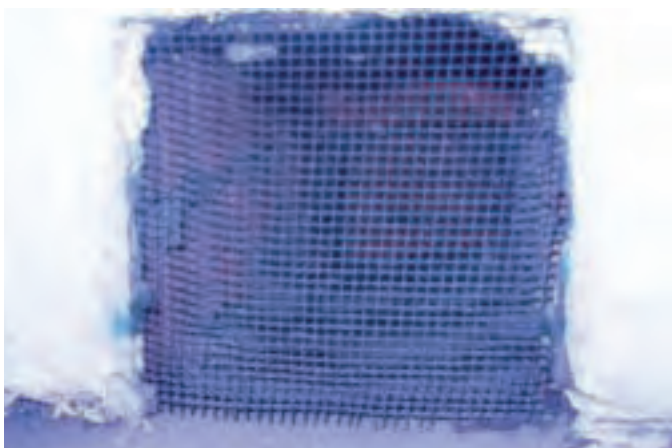
内壁は漆喰が塗布されている。内部に入り目を引くところは、天井が寄せ棟の形状に合わせたドーム型になっていることである(図2)。ドーム最高点までは約4メートルを計る。

経蔵に窓はないが、通気孔が各壁面に2箇所ずつ、床に8箇所の計16箇所に設置されており、それぞれがよく機能しているようである。そして、これらの通気孔にも工夫が凝らされている。まず、壁面のもは床から約2.4メートルの高さに10×13



[図2] 経蔵内部

センチに開けられている。この通気孔は内外部を直線で繋ぐのではなく、外気や湿気の侵入を緩やかにするためか、上下方向にクランク状に段差が設けられている。さらに、内側の開口部と壁心の段差部には目の細かい金網が張られ虫や鳥の侵入を防止している(図3)。つぎに、床面の通気孔であるが、開口部は15×24センチで口縁部に鉄製の縦格子枠を備え、小動物の侵入を防いでいる。実際、古い土蔵に見られる鼠等の食害は本経蔵には全く見られない。この通気孔は図6に示したようにあ



[図3] 金網

たかも煙突のごとくにして、各々基壇と繋がっているのである。ここで基壇の構造について説明しよう。基壇には北面を除き、各面2箇所を通気孔(図1・4)があるが、現在東面の孔は周辺の整備工事等により盛り土がされたようで塞がれている。これらの通気孔は外観からは経蔵の防湿のために、基壇内を乾燥させることを目的にしたものと思えた。しかし、内部をのぞいてみると、そこには煉瓦造りのアーチ型トンネルが存在していたのである(図5)。このトンネルは図6に記したように東西方向、南北方向に升目状に各2本ずつ通じている。そしてその天井部で経蔵床面の通



【図4】 通気孔

気孔に繋がっているのである。経蔵内部の換気は主としてこのトンネルからの風の流  
れにより行われ、その風は壁面の通気孔  
から抜け出るといふ構造である。風を、単  
なる高床ではなくトンネルにより通すこ  
とにより、通気の効率を高める事を意図  
したものであろうか。先述のように経蔵  
天井はドーム型に造られており、この構造  
は空気が澱みづらく、経蔵内の換気に大  
きな役割を果たしている。

では肝腎な唐櫃内の温湿度環境はどう  
であろう。これについては、吉川也志保氏  
がすでに測定している。それによれば、唐

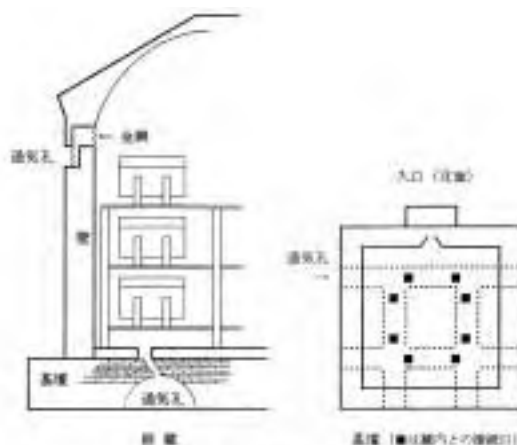
櫃内の湿度は昨年8月から今年の2月ま  
でであるが、60から66%の範囲内で推移  
しており、環境は比較的安定している。経  
典の現状を見ると、若干の虫損はあるが  
害虫の大量発生痕跡は見られず、カビ  
も櫃には見られるものの経にはなく、湿  
気によるフヤケもない。このことは、通気  
がよく機能していることを示し、現在まで  
経蔵の持つ機能だけでここまで来たとい  
う状況を鑑みれば、良好といえる。唐櫃が  
保存に適した容器であることはいまさら  
言を待たないが、しかしながら、それは蔵  
の中の状況に左右されることで、その点今



【図5】 アーチ型のトンネル

後の監視も必要である。

以上、経蔵の構造について見てきた。そ  
の特徴の第一は土蔵ではなく煉瓦構造で  
あることにある。煉瓦は、当然のことなが  
ら土を塗り固めた土蔵よりも耐久性に優  
れているし、防湿面でも土蔵より上であ  
る。煉瓦の特質は、磁器と違い低温で焼  
くため堅さはないが中に隙間が多くでき、  
それが調湿には有効な構造となっている。  
第二に、幾度かふれたように換気構造に  
様々な工夫が見られることにある。こと  
に基壇内の通気トンネルやドーム型天井  
は、筆者の狭い知見の中ではあるが、他に  
類例を見ないものではないかと思われ、当  
時設計に携わった人々の保管に対する認



【図6】 経蔵及び基壇構造概略図

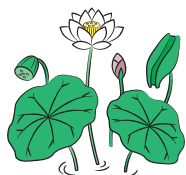
識の高さを表しており、明治期の経蔵と  
しても貴重な建造物であろう。

本経蔵は建造以来百年余を経過し、な  
お現役で健在である。しかし、蔵を囲む  
環境は激変し、もはや往時のままではな  
い。本調査ではご許可を得て床の通気孔  
に活性炭入りのフィルターを設置したが、  
もちろんこれだけでは充分ではない。開け  
ば本一切経にはすでに消滅したと思われ  
ていた経典も多く含まれるという。そのよ  
うな貴重な経典を今後どのように保存し  
ていくのか、温湿度、排気ガス対策等々今  
後の課題は多い。

最後に、本調査に筆者の参加を許され  
貴重な機会を与えてくださった、七寺蟹  
江良三師並びに落合俊典先生には厚く御  
礼申し上げます。

【執筆者紹介】

中村一紀(なかもむら かずのり)  
宮内庁書陵部。國學院大學文学部史学科卒業。  
70年宮内庁入庁。  
以来書陵部所蔵古典籍等の保存管理部門を担当。





## スクロールビューアについて

村川 猛彦

開発中のスクロールビューア

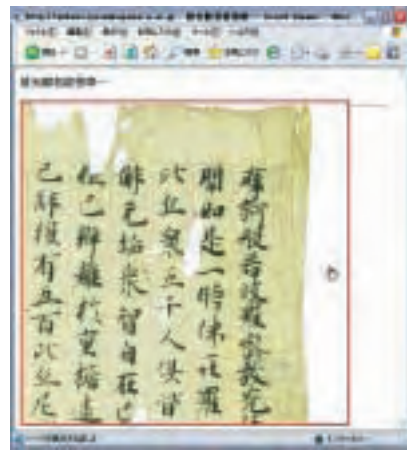
(ScrollViewer)について紹介します(図1)。

これは、デジタルカメラで撮影された經典画像を、パソコン上でスムーズに見るためのWebアプリケーションです。マウスのドラッグ&ドロップ操作のみで、視点を上下左右に移動することができます。

このアプリケーションで使用する經典画像は、あらかじめ分割しておきます。

表示の際には、必要な断片画像のみがあればよいので、単一の大きな画像を送るよりも、通信量の低減が図れます。画像ファイルの他に、画像を表示する土台となるHTMLファイルおよびCSSファイルと、表示の処理をするJavaScriptファイルも用意しておきます。表示するパソコン側では、最低限、Webブラウザが必要ですが、先ほど「通信量」と書きましたが、通信は必須ではなく、表示するパソコンの中にファイルを入れておけば、パソコン単体で画像を見ることが可能です。

スクロールビューアの開発に際して苦労をしたのが、「画像処理」と、「プラットフォームの選択」でした。



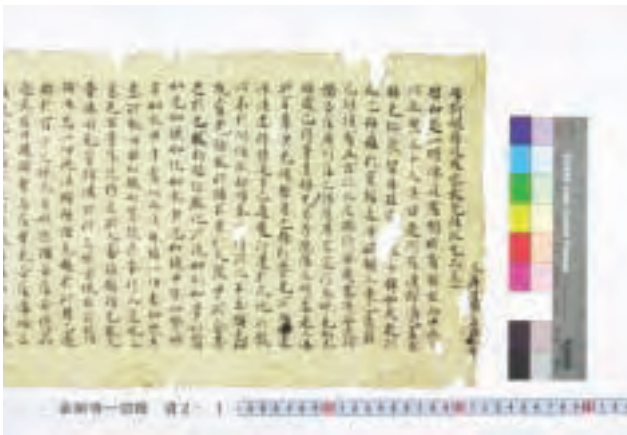
【図1】スクロールビューアの画面

仏典データベースの構築というテーマで研究に参加することになり、最初にいただいた画像は、金剛寺一切経の『摩訶般若波羅蜜放光經』放光品第一(『放光般若經』巻第一)でした。原本は卷子(巻物)であり横に長く、撮影画像は20枚のコマに分かれていました。図2はその最初のコマです。その上、隣り合うコマどうしで行か重複しています。画像処理ソフトを使用して、手作業で切り貼りして合成画像を作るといのは、数が少なければの方が簡便ですが、金剛寺一切経だけで4,000巻以上に及び、将来的には他の寺院でも撮影するのでもっと増える聞き、切り貼り作業を自動化できないか、

検討しました。

最初に、コマごとに文字領域を認識するプログラムを作りました。その際、それぞれの文字領域は長方形で表すものとなりました。すなわち領域は、左端のX座標、上端のY座標、幅、高さの四つの数値で表現します。さらに、縦書きのそれぞれの行は、X座標と幅を同じ値としました。これにより、持つべきデータの量を減らすとともに、座標情報を含む仏典画像データベースの中で、經典／画像／行／文字という階層関係(一対多の関係の連鎖)を自然に構成することができるようになりました。

求めた文字領域の情報を、隣り合う



【図2】撮影画像(『放光般若經』巻第一)

コマの重なり位置の推定に使用しました。当初は重なり位置の検出にも画像を使っていた、処理に時間がかかる上に成功率も高くなかったのですが、数値情報のみを使って求めることで、処理時間は一瞬となり、成功率も、『放光般若經』巻第一の19箇所の隣り合うコマに対して、18箇所で正しい位置でした(残り1箇所は、今のところ、手作業で数値を修正しています)。図3は、機械的に認識した領域に線を引き、正しく認識しているかを目で確認するために作成した画像です。青の箱(緑の線が上にあるので一部見えていません)が紙の部分、緑の箱は隣り合うコマとの重なりを排除した領域、赤の箱は認識した文字領域です。一つの文字を複数の赤い箱で囲っていたり、あるいはその逆もあり、文字領域認識には改善の余地があることが分かります。左上にある、太く囲んだ赤い箱は、隣のコマと結合する際の基準となる文字領域で、これを見れば、重なり位置の推定が正しいかどうか容易に判断できます。そして、上下左右の不要な領域を切り落とし、隣り合うコマの間で上下方向のずれを調整して、1枚の經典画像(合成画像)を自動で作成するプログラムを作りました。『放光般若經』巻第一については、



【図3】領域認識の例

当の時間がかかります。そこで次に、この画像を低コストで見える方法を検討しました。

表示のためのプラットフォームとして、まずはJavaアプレットで実装を試みましたが、イベント処理(マウスの操作などを検知して、表示を変更すること)を含むプログラミングに不慣れだったため、使えるシステムには至りませんでした。一方、昨年あたりから、Ajaxと呼ばれる、JavaScriptとXMLを組み合わせた通信技術が注目されました。その時期に出た

2,000×1,314ピクセル(画素)の20枚の画像を用いて、29,602×1,049ピクセルの画像が出来上がりました。これは、標準的なパソコン画面の約40倍に相当します。ファイルサイズは、PNGフォーマットで約41メガバイトでした。

現在は1,200万画素のデジタルカメラで撮影していると聞いていますので、それで20枚のコマを合成すれば、画面200枚分に相当する画像が作られることとなります。ファイルサイズも100メガバイトを超えてしまいます。そのようなファイルは、サーバからパソコンに送るにも、またそれを見るにも、相

処理をして作った『大方広仏華嚴經』巻第三(約20,000×600ピクセル)や、合成画像としていただいた『一切経音義』(約120,000×2,000ピクセル)を50%縮小して使用)についても、同様に見ることができるようになりました。サーバから断片画像を最初に受け取る時は、なかなか表示されずやきもきすることもありますが、一度取得すれば、表示領域から外れてまた戻ったときには、再取得せずに表示します。

国際仏教学大学院大学と和歌山大学とで通信実験をして、スムーズに表示できることを確かめました。研究室内で、通信速度の上限を様々に設定してテストしたところ、800キロbps(1秒間に800キロビットの通信速度)あれば、支障なく表示できることが分かりました。現在、ADSLにせよ光ファイバーにせよ、数メガあるいは数十メガbpsで通信できますので、将来公開したときにも、一度に多数のアクセスがない限り、支障なく運用できそうです。

『放光般若経』巻第一について、このアプリケーションを試してみました。断片画像の大きさは128×128ピクセルとして、合成画像を分割し、HTMLファイル、CSSファイル、JavaScriptファイルは書籍からそのまま打ち込んだ上で数値をいくつか変更して、ブラウザで表示させたところ、うまくいきました。他に、同様に画像

が紹介されていて、これを応用することになりました。画像をあらかじめ断片化しておくのは、冒頭で記した通りですが、表示するための仮想の領域をブラウザの内部で確保しておくのが、もう一つの特徴です。

画像と座標情報のデータベースと、CBETA(中華電子仏典協会)のテキストデータに対する全文検索システムの別々に構築していますが、これらを結び付けて、テキストファイルの指定位置に対応する画像を示せるようにしたいと考えています。そして、単に画像を見るだけでなく、そこにコメントを埋め込む機能も提供したいところです。読解の留意点を教員が付ければ、学生に対する教育効果も期待できます。このコメントの概念は、Web2.0の分野では「タグ」と呼ばれます。經典／画像／行／文字のような機械的な階層関係とは別の切り口で、人手でタグを付け検索や情報の再利用に活用するのは「フォークソノミー(folksonomy)」と呼ばれます。これは、「民族・人々(folk)」と「分類(taxonomy)」とを組み合わせた造語であり、Web2.0のキーワードの一つです。

【執筆者紹介】

村川 猛彦(むらかわ たけひこ)

大阪府生まれ。奈良先端科学技術大学院大学博士後期課程修了。同大学助手、和歌山大学助手を経て、現在は和歌山大学システム工学部情報通信システム学科専任講師。研究テーマは、データベースシステムとインターネットアプリケーション。デジタルアーカイブ、医療情報システム、アグリバイオ情報学などの分野に関心がある。



金剛寺にのみ現存する安世高訳『安般守意経』など、そこに見られる安世高の漢訳の苦勞

# 金剛寺一切経と安世高の漢訳仏典

デレアナ フロリン

安世高(活躍期:184年~168年頃)と云えば、仏教史上に於いて初めて漢訳という偉業を成し遂げた人物である。安世高の残した漢訳仏典は、初期中国仏教において重要な役割を果たしたのみならず、紀元1~2世紀頃のインドや中央アジアの仏教を伝える非常に貴重な資料でもある。実は、僅かな経

典を除けば、パーリ語やガンダーラ語、仏教梵語、サンスクリット語等の現存のテキストの殆どは、安世高よりはるかに後の時代の写本を基にして伝わっている。多くの仏典は、しばしば増加改訂の編纂過程を経て伝承されており、その原型あるいはそれに近いテキストを知るためには、安世高をはじめとする初期の漢訳仏典が、極めて重要である。

しかし、安世高の漢訳仏典は充分利用できないというのが現状である。その主な理由は、甚だ難解な訳風であり、またその訳出経典の一部が乱れた形で現存しており、更に安世高訳の仏典の中には散逸しているものも有るといふ事が挙げられる。1999年に梶浦晋先生と落合俊典先生によつて天野山金剛寺の一切経の中に発見された『十二門経』や『解十二門経』、『安般守意経』は、画期的なものと言えるに相違なく。『十二門経』は、『仁寿録』(602年)においては既に欠本と記され、古逸書と思われていた。(詳しい分析は、S. Zaccchetti, 'The Rediscovery of Three Buddhist Scriptures on Meditation: A Preliminary Analysis of the *Fo shuo shi'er men jing*, the *Fo shuo jie shi'er*

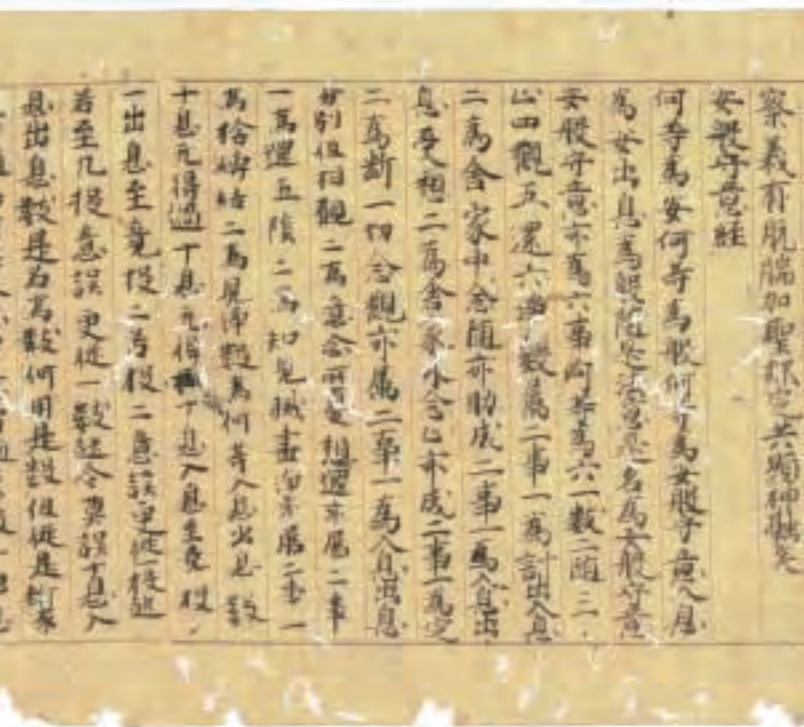
*men jing* Translated by An Shigao and Their Commentary Preserved in the Newly Found Kongō-ji Manuscript', *Annual Report of the International Institute for Advanced Buddhism at Soka University* 6 (2003): pp. 251-299 参照。)

金剛寺本の『安般守意経』は、従来知られていた『安般守意経』のテキスト(所謂大正蔵本)とは全く違う異本である。大正蔵本では、原文と幾種もの中国の注釈文とが複雑に混交している為、その原義の正確な復元と読解は難航していた。金剛寺本の『安般守意経』は、安世高特有の文体の難しさが認められるものの、その文章の構造は、大正蔵本とは比べものにならないくらい明確である。大きく分けて、その構成は以下の通りである。

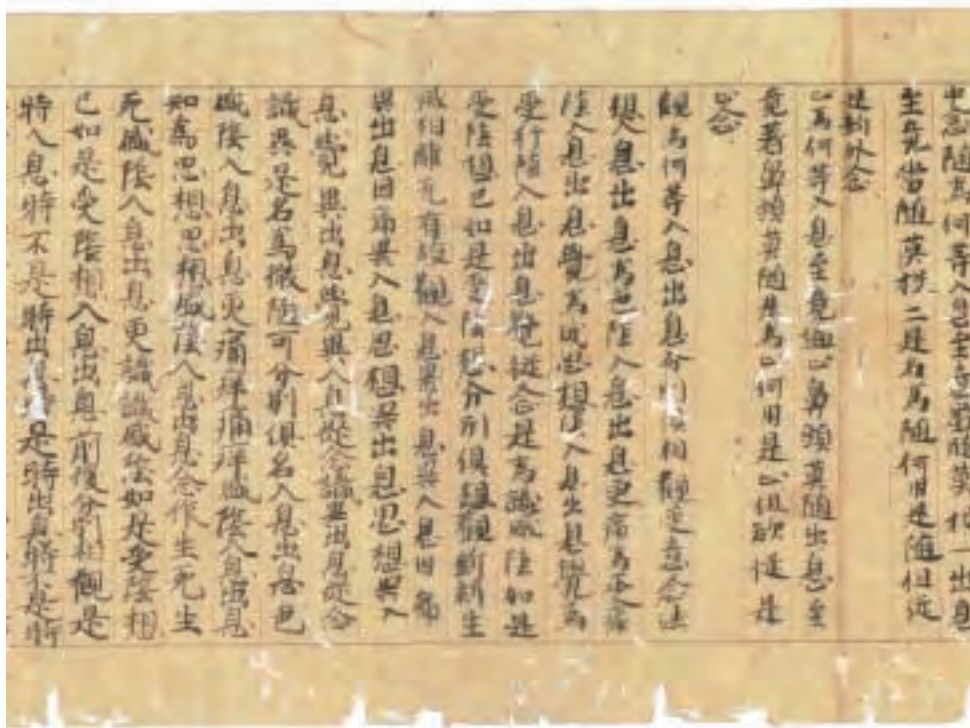
- (1) 『安般守意』、即ち呼吸を対象とする瞑想法の字義(写本の甲本61~62行)
- (2) 「六事」、つまり安般念の6つの段階(数、随、止、観、還、淨)の説明と修行法(63~126行)
- (3) 三十七菩提分法の論述(127~217行)
- (4) 修行階梯関連の概念の解説(217~241行)
- (5) 修行の四果の詳述(241~274行)

(金剛寺本を含めて、『安般守意経』については、拙論『The Newly Found Text of the *Anban shou yi jing* Translated by An Shigao』(*Journal of the International College for Advanced Buddhist Studies*, Vol. 6 (2003), pp. 63-100)に詳しく考察をせし載せた。)

ハ)は、安世高の訳語訳風について少々考へてみ







金剛寺蔵『安般守意経』

たいと思う。安世高の文体特有の難解さをもたらすものに、幾つかの要素が挙げられるが、その一つは、自然な漢文を無視する程の直訳的な訳風である。『安般守意経』のインドまたは中央アジアの原文は見つかからないが、金剛寺本の訳風に類似している安世高訳『陰持入経』を例に取ってみると、その事実がよく解る。最近、『陰持入経』は、パリー語で書かれている *Peṭakopadesa* という文献の一部の訳である事が判明した (S. Zaichetti, 'An Early Chinese Translation Corresponding to Chapter 6 of the *Peṭakopadesa* An Shigao's *Yin chi ru jing* T 603 and Its Indian Original: a Preliminary Survey', *Bulletin of the School of*

*Oriental and African Studies* 65 (1) (2002): pp. 74-97 参照)。

例えば、『陰持入経』の「仏経所行亦教誡、皆在三部為合行」(T15.173b5) という文章に相当する *Peṭakopadesa* の原文は *Buddhānam Bhagavāntnam sāsānam tividheṇa saṅgaham gacchati* (PTS ed., p.112) となっている。原文の意味は、「諸仏、諸世尊の教えは、三種の概念に集約されている」である。安世高は *saṅgaham gacchati* [...] に含まれる「撰せられる」という慣用表現を直訳的に訳している。つまり、*saṅgaha*「集まり」は「合」と訳し *gacchati*「行く」は「行」とし、併せてそれを難解な「為合行」という言い回しを生み出す結果となった。

また、『陰持入経』の「比丘自身身相観行止。外身身相観行止。内外身身相観行止。」(T15.173c29) は *Peṭakopadesa* の *Idha bhikkhu kāye kāyānupassī viharati* (p.114) となっている。

(特に「止」= *viharati* の異例な位置) が解る。安世高の文体の難しさのもう一つの原因は、安世高と筆受した中国人弟子との間に恐らく存在したと思われる言語の壁であろう。中国の史料に拠れば、安世高は漢語を習得したそうであるが、それが完璧だったとは思えない。安世高の勤勉さを否定するわけではなく、更に、初めての漢訳という恐ろしい程難しい試みに挑んだ事を考えると、その努力は絶賛に値する。しかし、一方では、安世高の漢語との格闘や弟子との間の誤解も否めない面も有ったかと推察される。安世高が果たしてどこまで漢訳文書の出来を確認し得たのか、言い換えれば、どこまで漢文が読めたのかという点に於いては疑問が残る。安世高の訳経の複雑な訳語や拙い文体の一部はそれに由るものではないかとの感が強い。

例えば、安世高の一部の訳経(大正蔵本『安般守意経』や『七処三観経』等)に於いては、*sanskāra*、普通「行」と漢訳される語は「生死」と訳される。この訳は、*sanskāra* という語がなまった発音(安世高自身のパルティア語の訛り?)に影響されて *sansāra* (「輪廻」と間違えられた、と想像され得る。或いは、安世高のこれら単語の近似音また教理上での関連についてのなららかの口頭解説が中国の弟子に誤解されたのである)だろうか。何れにしても、出来上がった漢訳の文章を調べてみれば、「生死」という誤解を招く訳に気付くはずである。実は、『陰持入経』等の安世高訳の他の仏典においては、*sanskāra* は「行」と訳出されている。(本学教授)

浄土教関係の文献7点を紹介

# 天野山金剛寺の 浄土教典籍

落合俊典

天野山金剛寺は真言宗御室派の著名な古刹である。多くの密教聖教はもとより浄土教の珍しい典籍を有していることでも知られている。かつて大正年間に東大の黒板勝美教授によつて信瑞撰『明義進行集』巻二が発見され、浄土教研究者に驚きの目で迎えられた。この書は古来より探求し続けられてきた稀覯本中の稀書であつたが、その後も僚本は発見されていぬ。まさに天下の孤本といえる重要典籍である。

## 【参考文献】

望月信亨「信瑞の明義進行集と無観称名義」『浄土教之研究』所収、金尾文淵堂、1930年  
江藤激英編『浄土仏教古典叢書』（国書刊行会、1984年）  
大谷大学文学史研究会編『明義進行集影印・翻刻』（法蔵館、2001年）

ところで、このような珍品を有することになったのはどのような事情があつたのであろうか。一説では、好事家の学僧が蒐集したと想定されていたが、近年の金剛寺聖教調査において浄土教の典籍が続々と発見され、この見解を大幅に改めなければならなくなつてきた。数多くの文献が見られるが、その中主要な聖教7点を紹介したい。

### ① 保延4年(1138)写『無量寿経論註』巻下 最古写本

中国浄土五祖の第一、曇鸞(476～542)の原著の最古本はこれまで親鸞加点点(建長8年・1256年)とされてきたが、本書の発見により百十余年も遡ることとなつた。だが、本書の価値は古



【図1】 保延4年(1138)写『無量寿経論註』巻下冒頭部分



【図2】 長寛3年(1165)写『観無量寿経』巻末部分

さだけではない。巻下の全部に亘つて綿密な訓点が付されていること、それが正確であることにより院政期浄土教の研究が生半可なものでなかつたことが実証できるのである。

### ② 長寛3年(1165)写『観無量寿経』

「浄土三部経」という名称は法然が名付けたのであるが、これまで平安院政期の三部経は装飾経を除いて殆ど発見されて来なかつた。金剛寺で発見された『観無量寿経』は書写年代が長寛3年であり、しかもヲコト点(朱点)が全編に付されている。これは天爾波留点(別流)で

あるが、築島裕博士の解説では10～11世紀の叡山で盛行した訓点であるという。これが事実とすれば平安時代の叡山浄土教の根本テキストが河内の真言宗寺院まで流伝したことになる。大きな発見と言えるだろう。

### ③ 鎌倉時代写『般舟讚』(残欠)最古写本

善導(613～681)の『依観経等明般舟三昧行道往生讚』(『般舟讚』)の写本である。わずかに表紙と一丁だけの断片であるが、院政期末から鎌倉時代にかけて書写されたと思われる。『般舟讚』最古の写本である。仁和寺経蔵から発見された写本の系統と異なる本文を有することからさらに残存部分の発見に期待がかかる。



【図3】 鎌倉時代写『般舟讚』冒頭部分(左)とその拡大図





【図4】『集諸経礼懺儀』巻下所収『往生礼讚』

④『集諸経礼懺儀』巻下(善導撰『往生礼讚』)  
『開元録』の編集で有名な唐の智昇が編集した『集諸経礼懺儀』は上下2巻となつている。これが一切経の中に入蔵されているのは些か奇異である。下巻は善導の『往生礼讚』そのものである。『往生礼讚』一巻として何ら差し支えないのである。しかしそのようにしなかつたのは実行し難い面があつたのであろう。盛唐代の仏教界には錚々たる学僧が綺羅星の如く連なつていた。金剛寺本には、智昇が強引に入蔵させたことを窺わせる文



【図5】刊本『選択集』部分とその拡大図

面が残存している。一切経は一行17字とした形式を基本としているが、六時の礼讃を行う行儀の書である『往生礼讚』には割注を多用して法式を示している。後の刊本には消えたこの割注が重畳して見られるのは圧巻である。  
⑤刊本『選択集』(断簡)鎌倉古版、及び室町時代写本『選択集』下  
浄土教の刊本の多くは鎌倉時代を濫觴とする。中でも『選択集』は建暦2年(1212)に刊行されているが、この版は失われて現存しない。その後延応元年(1239)版や建長3年(1251)版が出ている。金剛寺の『選択集』(断簡)は、京都の西本願寺にある鎌倉古版の後刷りかと想定されるが、象嵌によって一字を訂正している。また寄せ本とした下

巻は室町時代の写本である。  
⑥『和語灯録』巻三 高野山で書写  
法然の法語録である『黒谷上人語灯録』は15巻であるが、そのうち10巻は『漢語灯録』で、5巻が『和語灯録』である。金剛寺本はこの『和語灯録』の巻三に相当する。書写年代は正平6年(1351)であるが、龍谷大学には元亨版『和語灯録』(1321)があり金剛寺本より古い。しかし、元亨版は平仮名交じり、金剛寺本は片仮名交じりの和漢混交文から推測できるように本書を了恵が編集した文永12年(1275)当時の書の系統を引いていることは間違いないであろう。同系統本として京都の西方寺に巻三があるが完本ではない。



【図6】『和語灯録』巻三冒頭部分

⑦『念仏要文抄』(仮題)  
南北朝から室町初期にかけて書写されたと覚しき題名未詳の念仏要文抄なるものがある。本書は源信の『勸心誠行偈』と『姪欲教誠詞』の抄写引用に続き、一遍聖の踊念仏和讃が七五調のリズムで書かれている。さらに善慧(証空)や法然の伝記、法語が連写されているが、法然関係の抄写は3巻本『法然上人秘伝』からの引用と思われる。



(本学教授)

【図7】『念仏要文抄』(仮題)所収「法然伝」部分

古写経の大敵「カビ」、その実体と予防法は？

# 古写経と微生物

吉川也志保

微生物は、小さな生物であるものの、その種類はきわめて多く、地球上のいたるところに生息しており、古写経の劣化を引き起こす要因のひとつでもある。一般的に、書籍文化財に影響を与える微生物には、真菌類や細菌類などが挙げられる。真菌類とは、菌類(Fungi)のなかで単細胞または菌糸から成り、細胞壁を持つものである。そして、細菌類とは、原核生物に属する単細胞の微生物である。細菌類が、水害や火災を消火した際の水濡れ、あるいは漏水・結露といったように水分が豊富な環境でないと生育できないのに対し、いわゆる「カビ」と呼ばれる真菌類は、室温環境でも生育しやすいため、もっとも問題となりやすい。

こういった菌類は、光合成をすることができないので、自分から有機物の栄養分をつくることはできず、周りの環境から栄養分を吸収して生育する。つまり、仮に、古写経にカビなどの菌類が生えているということは、古写経を形成している材料を栄養源としながら、その基質を分解し



【図1】 小口に発生した微生物の例。

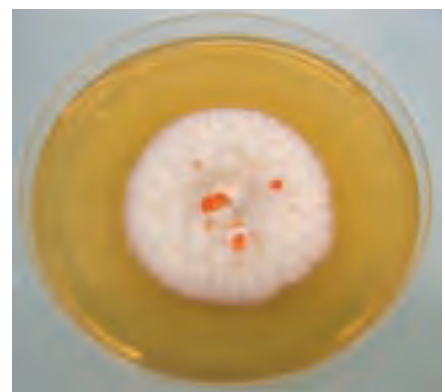
ていることにはかならないため、放置しておくことにはおと紙などの脆弱化や欠損を招き、代物などによつて生じる汚損からテキストの判読を困難にさせる危険性を伴っている。また、発生した菌類を食する昆虫が誘引されてしまう場合は、文献資料にとつて、より深刻な被害である虫害の発生を引き起こす原因にもなる。

ところで、私たちが、日頃「カビ」と呼んでいるものとは何だろうか。通常は、「真菌類のうち、菌糸により成長するものをカビ(molds)または糸状菌(filamentous fungi)、さらに、通常の存在状態が単細胞であるものを酵母(yeast)、肉眼的に観察できる大型の子実体をつくるものをキノコ(mushrooms)」というように呼びならわしている。実際には、酵母と糸状菌には重複した部分があるため厳密な区分はできず、キノコは糸状菌の生活環におけ

る一期間を指しているように、これらは分類学上の用語ではない。しかし、微生物の種類を大まかに把握する枠組みとしては便利な区分法である。

カビが発生すると、よく白っぽい斑点状、あるいは、綿状のもの、時には色のついた斑点状のものが料紙や装丁に生じる。折本などの場合は、表紙や料紙の表面だけでなく小口にあたる部分に見られることも多い(図1)。湿気がありカビが活発に増殖しているときは、特有のカビ臭さを伴うことが多く隔離する必要がある。乾燥などにより、カビが不活性な状態になると、臭気は弱まり、粉をふいたような感じにみえることもある(図2)。この

ような状態のものを発見した場合は、他の資料に付かないように注意しながら、そつと刷毛や筆などで払い取るようにする。より詳しい対処法が掲載され



【図3】 学名 *Penicillium janthinellum* : 寒天培地上に培養されたコロニーからオレンジ色の代謝物が生成されている。

ている『文化財カビ被害防止チャート』は、東京文化財研究所保存科学部のホームページから無料でダウンロードすることができる(参照 <http://www.tobunken.go.jp/~hozon/kabichart.jpg>)。

カビが原因で引き起こされるシミなどの着色には、胞子や菌糸が沈着して色がついてしまう場合と、カビの代謝物(図3)の放出・分解の過程で変色させる場合がある。黒い胞子を形成するため、通称、黒コウジカビの名で知られる学名 *Aspergillus Niger* は前者の例にあたる(図4)。また、キノコを形成することでも知られる担子菌類が見られることもある(図5・図6)。余談ながら、フランス語で champignon(シャンピニオン)という語は、一般的には「マッシュルーム」などのキノコを指すのだが、カビやキノコの総称として菌類を指す言葉と

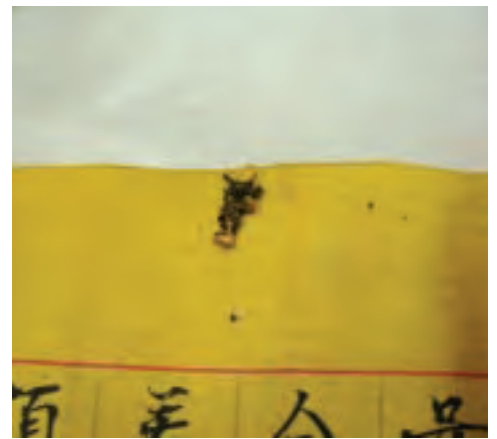


して用いられることもある(『プチ・ロワイヤル』和辞典』第三版 旺文社参照)。このため、フランスでは西洋写本等に発生したカビのことを、いわゆるカビを指す言葉である *moisissure* と表現する以外に、端的に *champignon* と表現する(2)があるのにも頷ける。

カビは、生育すると胞子をつくり、胞子は空気につけて運ばれ、あらゆる場所に付着する。胞子の大きさは一般的に1マイクロメートルから200マイクロメートルほどである。通常の環境では、カビの胞子はどこにでも存在するが、その環境がカビの生育に適さなければ、胞子は発芽することなく生育することもない。しかし、適度の水と栄養分があれば、胞子は付着した部分から発芽し、その生育は始まる。このような菌類による生物



【図4】小口に発生した黒コウジカビ(学名 *Aspergillus niger*) の例。



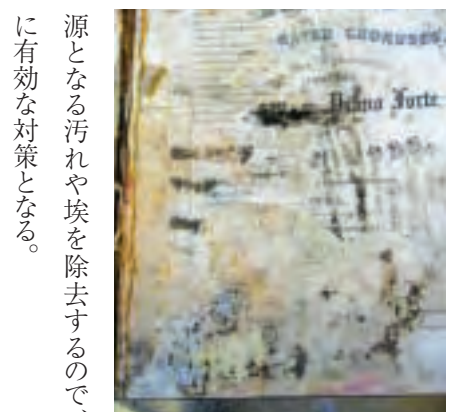
【図5】担子菌類が発生した例。中央部の黒い粒状のもの。

被害は、一度発生してしまうと、ある程度の集密度を超えた時点で爆発的に拡大する恐れがあり、専門家に相談し、原因を究明して何らかの対策を講じない限り、薬剤を用いて殺菌処理を行ったとしても保管している環境を改善せねば、被害は繰り返し発生する(図7)。そして、カビによって生じてしまった染みや汚れを修復や化学処理によって除去することは非常に困難である。さらに、人体にアレルギーを引き起こすほか、カビにはマイトコキシンを生成したり、病原性を有するものもあり、それらが多く発生している場所で作業にあたる際には、人体への安全性を十分に確保することが必要である。また、二次的な日和見感染を避けるためにも、このような作業にあたった後には、衣服や髪に胞子などが付



【図6】担子菌の顕微鏡写真。ろ紙の上で撮影。粒上ものが繊維状の菌糸で形成されているのが確認できる。中央部は子実体。

着したままの状態、抵抗力・免疫力の弱い人と接触することは避けるべきだろう。したがって、後世に伝承すべき文献を守るためにも、人体の安全性のためにも、こうした被害が発生してから何らかの科学的処置を行うのではなく、日常的な点検を含めた予防対策が重要である。貴重な古文書が大切にしまわれていることで、人目に長い間触れることがなく、かえって被害の早期発見の機会を逃してしまうこともありうる。被害を抑制するためには、保管場所には湿気だまりをつくらず、湿度が高い環境には、なるべく長期間放置しないといったような水分のコントロールをすることが最も根本的かつ基本的な対策である。そして、こまめな掃除やクリーニングは、カビの胞子をはじめ、カビの栄養



【図7】殺菌燻蒸処理を行ったにもかかわらずカビが再発生した事例。

#### 【参考文献】

- 村尾澤夫・荒井基夫共編『応用微生物学 改訂版(第14刷)』培風館、2003年  
三浦定俊・佐野千絵・木川りか「文化財保存環境学」朝倉書店、2004年  
佐野千絵・木川りか「博物館におけるカビのコントロール」『文化財の虫歯害48号』所収、2004年12月  
木川りか・間測創・佐野千絵「文化財展示収蔵施設におけるカビのコントロールについて」『文化財保存修復学会誌第48号』所収、2004年、pp.98-113

#### 【執筆者紹介】

吉川 也志保(きつかわ やしほ)

東京都生まれ。フランス国立図書館保存部でのインターンを経て、保存環境調査法などを学ぶ。一橋大学大学院博士後期課程に在学。研究テーマは、古籍保存の技術と歴史。現在、東京文化財研究所保存科学部の協力を得て、様々な書籍文化財の保存環境を調査中。

# 西方寺

奈良県の浄土宗寺院、2,000巻を超える古写経を所蔵

從是山じゅうぜざん西方寺は、奈良県大和郡山市にある浄土宗の寺院です。永正年間（1504～1521）に西念によって開かれました。元々は現在地より北の尼ヶ辻（奈良市）にあったのですが、文禄年間（1592～1596）に現在の地に移ったとされています。現在の西方寺付近には多くの寺院が集まっています。境内には本堂・経蔵などがありますが、近年鉛筆供養塔が建てられました。本尊の木造阿彌陀如来立像は藤原時代の作です。経蔵は、後述する大門寺一切経を購入したときに建立されました。中には西岸寺（廃寺）開山の天誉の木造坐像があります。

西方寺一切経は、元禄年間（1688～1704）、第11世知蓮の時に大門寺の一切経を購入したことに始まります。大門寺一切経とは、摂津国三島郡石河村（現茨木市）の摂津観音大門寺に所蔵されていた一切経のことで、石田茂作・田中塊堂両氏によりその存在が明らかになりました。西方寺一切経中の平安・鎌倉写経は、その大門寺一切経なのです。内訳は、平安写経

が1,341巻、鎌倉写経が840巻（加えて開巻不可能本が351巻あります）で、その他に元版18巻・春日版43巻がありますが、その2種は大門寺一切経であったものかどうかは不明です。また、大門寺一切経購入分以外には、江戸時代に書写されたものが36巻あります。

西方寺一切経は、戦後に大門寺一切経の存在が明らかになったことから、注目されるようになりました。昭和50年（1975）に、西方寺一切経は大和郡山市指定文化財となり、昭和56年からは、元興寺文化財研究所による詳細な一切経調査が行われ、報告書が出版されました。

本プロジェクトでは、デジタルカメラで西方寺一切経全巻の巻首部分を撮影し、重要な文献に関しては高解像度のカメラで行っています。



西方寺経蔵

## 【参考文献】

元興寺文化財研究所編『大和郡山市西方寺所蔵一切経調査報告書』（大和郡山市教育委員会、1984年）

（三宅徹誠）

## 調査日記

### 調査の様子伝えます

本日、7月15日は大和郡山市にある浄土宗西方寺の調査日である。京都からは近鉄電車に乗ると、40分程で近鉄郡山駅に到着する。駅付近の城下町の風情が色濃く残る市街地のなかにその西方寺は位置する。この大和郡山は古くは筒井順慶、豊臣秀長によって治められ、近世には柳沢吉里といった領主によって整備された城下町であり、箱本十三町などを形づくった歴史的な景観を多く残している。西方寺一切経はそのような景色のなかに護持されてきた。

現存する一切経から奈良・平安期の一切経のデータを復元するという本計画の中で、ある經典の全巻のデータをひとつの調査先から抽出できることは希有なことである。したがって、奈良平安期の一切経の全体像の復元のためにはさまざまな調査先のデータから相互に欠巻を補う必要があり、それを可能にする經典の存在は不可欠である。その意味で西方寺一切経の調査は重要である。ただ、今回は使い慣れた撮影機材が使えなかったが、入念な準備と様々な道具を適切な作業道具に代用する機転と、各人の技量で跳ね返すことが出来た。加えて、十分過ぎるほど広い本堂を調査室として快く提供してくださるなど、西方寺御当院の御配慮に支

えられてはじめて成就するものがあった。

調査の日程を終了し、帰途に就いた時、町の



調査風景

美観の一つである外堀には郡山の情景が凝縮されているようにさえ感じられた。城下町の遺構に昔と変わらぬ流れをたたえる水堀には古い文化への住民の敬意が反映されているように思えたからである。いまそいつた風景を横切りつつも、古来より脈々と続く文化を継承し保全する町の努力、そして、何よりも平安院政期から鎌倉時代にかけて書写された一切経を連綿と保持してきた西方寺に最大の賛辞を贈りたいと思うのである。

（能島寛）

## 活動記録

### 公開研究会

#### 古写経研究の最新事情

今年度の学術フロンティア公開研究会は本学において3回に渡って行われたが、以下はそのうちの第1回と第2回の報告である。日時、発表者、および発表題目は次の通りである。



○第1回公開研究会

平成18年5月27日(土)午後3時～5時

上杉智英(国際仏教学大学院大学学術  
フロンティア研究補助員)

「日本古写経中の『往生礼讃』」

箕浦尚美(国際仏教学大学院大学学術  
フロンティア研究員)

「玄応撰『一切経音義』の日本現存古写本  
について」

落合俊典(国際仏教学大学院大学教授)

「一切経と一切経音義」

○第2回公開研究会

同年10月14日(土)午後3時～5時

池麗梅(国際仏教学大学院大学学術  
フロンティア研究員)

「金剛寺本『餓鬼報心経』について」

佐藤もな(同右)

「七女経」古写本に関する諸問題」

宇都宮啓吾(大阪大谷大学教授)

「大乘起信論」の古点本について」

上杉氏は、善導撰『往生礼讃』が収めら



宇都宮啓吾教授



落合俊典教授

れる智昇撰『集諸経礼讃儀』巻下の有する資料的価値に言及し、特にその七寺本・松尾社本の系統について論ぜられた。

箕浦氏は、玄応撰『一切経音義』の日本

現存写本の本文系統を検討し、また各巻の冒頭に挙げられる所収経典の配列順に

錯簡が見られる理由について解説された。

落合氏は、もとは『大唐衆経音義』とい

う名で呼ばれていた玄応撰『一切経音義』

が則天武后の時代に名称変更された可能性があることを指摘し、あわせて玄応自身

の依拠した一切経が如何なるものであった

かという問題について考察された。

池氏は、『餓鬼報心経』の金剛寺本に注目し、それを高麗本をはじめとする諸版

本や他の日本古写経本(西方寺本・七寺

本)によって校訂する際に浮かび上がる問

題点について論ぜられた。

佐藤氏は、金剛寺本『七女経』が支謙訳

とされる現行の『七女経』と異なることを紹

介し、経録に記載される3本の訳や『経律

異相』中の引用に触れながら、本経の問題

について言及された。

宇都宮氏は、中世以前における『大乘起

信論』の訓読の実態をうかがわせる古点本

の中から東寺観智院本を検討しながら、『大乘起信論』訓読法の時代的変遷や宗派

における訓読法の相違について論ぜられた。

第1回、第2回とも質疑と応答が活発

に交わされ、会は盛況裡に終了した。第3

回公開研究会の報告については次号の「い

とくら」に掲載する予定である。

出版物紹介

『大乘起信論』

写本・刊本を7種掲載

平成18年度の研究報告として、日本古

写経善本叢刊(第2輯)『大乘起信論』を

刊行する。本書では、平安鎌倉時代に書

写された真諦訳『大乘起信論』やその宋版

などを紹介する。

『大乘起信論』は、大乘仏教の重要思想

である如来藏思想を、簡潔でありながら

も論理的に展開した論書である。本書に

は、サンسكريット本がなく、六朝梁代の真

諦と唐代の実叉難陀による2種類の漢訳

のみが伝えられているため、これを中国撰

述とする見方もある。2種の漢訳のうち、

古来、東アジア世界の仏教者によって盛ん

大な影響を及ぼしてきたのは、真諦訳『大

乘起信論』(1巻)である。

今回の出版では、真諦訳『大乘起信論』

の写本や刊本を7点ほど取り上げる。そ

のうち、影印で紹介するのは、金剛寺一切

経本(1巻、附翻刻文)、金剛寺藏保元2

年(1157)写本(1巻)、京都大学人文

科学研究所松本文庫藏宋思溪版本(1

巻)の3本である。このほか、真福寺藏本

(1巻、附翻刻文)、松本文庫藏の永徳

元年(1381)刊本(1巻)と大永6年

(1526)奥書付写本(1巻)、金剛寺藏

正嘉2年(1258)刊本(残本)の4点に

ついては、翻刻・解題などで紹介する。解

題は、本学の木村清孝教授、落合俊典教

授、大阪大谷大学の宇都宮啓吾教授、京

都大学人文科学研究所の梶浦晋先生よ

りご寄稿を賜った。

本書の意義は、『大乘起信論』の資料

的価値の高い諸伝本を採り上げたこ

とにあるだけでなく、金剛寺藏本な

どに付せられた古訓点の解説とその解

説によつて中世日本における読みが解明

されることにもある。これらの点によつて、

東アジア仏教に最も深遠な影響を与え

た論書の一つである『大乘起信論』の文献

学的思想的研究の更なる発展に対する

本報告書の貢献が期待されよう。

(研究員(PD)、池麗梅)

## 今後の活動予定

平成19年度の予定は以下の通りです。

### ◇公開研究会◇

5月26日(土)、10月13日(土)、11月17日(土)に、国際仏教学大学院大学にて開催予定です。

### ◇公開シンポジウム◇

12月1日(土)に開催予定です(会場未定)。

本学・学術フロンティアのホームページ(<http://www.icabs.ac.jp/frontia>)にて、講演者・題目等の予定を随時お知らせしておりますので、ご確認下さい。皆様のご来場をお待ち申し上げます。



## 学術フロンティア・スタッフ紹介

### 研究代表者

今西順吉

(国際仏教学大学院大学教授・  
国際仏教学院理事長)

### 研究分担者

Hubert DURT

(国際仏教学大学院大学教授)

津田眞一(同・教授)

木村清孝(同・学長、教授)

デレアヌ フロリン(同・教授)

落合俊典(同・教授)

赤尾栄慶

(京都国立博物館学芸課企画室長)

高田時雄

(京都大学人文科学研究所教授)

梶浦 晋

(同・附属漢字情報研究センター助手)

Christian WITTERN

(同・附属漢字情報研究センター助教)

宇都宮啓吾(大阪大谷大学教授)

大倉孝昭(大阪大谷大学教授)

中川 優(和歌山大学教授)

村川猛彦(和歌山大学専任講師)

### 研究協力者

佐藤愛弓

(日本学術振興会特別研究員(PD))

能島 寛

(浄土真宗本願寺派宗学院研究生)

三宅徹誠

(国際仏教学大学院大学附置国際仏教学

研究所非常勤研究員)

林 敏

(国際仏教学大学院大学博士課程)

末木康弘

(国際仏教学大学院大学附属図書館副館長)

### 研究員(PD)

青木 進・林寺正俊・箕浦尚美・

佐藤もな・池 麗梅

### 研究補助員(RA)

興津香織・上杉智英

## 次号紹介

一切経所蔵寺院紹介など、古写経研究における最新情報を、特集にてお伝えする予定です。

文部科学省 私立大学学術研究高度化推進事業  
学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」ニュースレター

いとくら 第2号

平成19年1月10日発行

編集・発行

国際仏教学大学院大学

学術フロンティア実行委員会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門5-3-23

URL <http://www.icabs.ac.jp/frontia>

E-mail [koshakyo@icabs.ac.jp](mailto:koshakyo@icabs.ac.jp)

制作・印刷 株式会社 高山